

コミュニティとは何だろうか

2012年5月20日

荒田鉄二

コミュニティとは？

- よく使う言葉ではあるが、定義するのはなかなか難しい。
- 群れで生きる社会的動物は多数いるが、階層性のある社会を形成するのは人間だけ。(河合雅雄)
 - ある人は、家族の一員であると同時に、どこかの会社の社員でもあり、日本社会の一員でもある。
- 人間が帰属意識を感じ、かつ相互に助け合うような集団で、個人から見ると家族の次に来る階層のものを「コミュニティ」と呼んでいるように思われる。

今なぜ「コミュニティ」なのか？

- 近年よく聞くニュース
 - 引き籠り
 - 独居老人の孤独死
 - 困窮家族の孤立死(餓死)など
- 上記のことが周りに人がたくさんいる都会の中で起きている。
 - このようなことはドイツでも起きているのだろうか？
- 日本の都会では人と人の繋がりが失われているとの問題意識から、コミュニティの再構築が議論されるようになった。
 - 都会における個人の孤立化→コミュニティの再構築

個人の孤立化の背景

- 農村から都市への人口大移動
 - 戦後、多くの日本人が農村コミュニティを離れた。
- サラリーマン社会の進展
 - 日本人は自分が住んでいる場所ではなく、働いている会社にアイデンティティを感じている。(生産コミュニティ)
 - 日本人は自己紹介の時に会社名を言う
 - 定年退職したり、会社をクビになると孤立してしまう。
- 人口の流動性の増大
 - 生まれた場所に生涯住み続ける人は少ない。
- 結果として、日本の都会では「生活コミュニティ」が十分に形成されなかった。

農業就業者割合の推移

年	総人口 (人)	労働力人口:A (人)	農業就業者数:B (人)	農業就業者割合(B/A) (%)
1920	55,963,053	25,866,195	13,948,776	53.9
1930	64,450,005	28,547,947	13,955,316	48.9
1940	73,114,308	32,661,308	13,557,098	41.5
1950	84,114,574	36,347,294	16,361,576	45.0
1955	90,076,594	40,026,550	15,063,788	37.6
1960	94,301,623	44,027,870	13,268,534	30.1
1965	99,209,137	48,268,767	10,987,230	22.8
1970	104,665,171	52,948,241	9,400,296	17.8
1975	111,939,643	54,389,675	6,692,382	12.3
1980	117,060,396	57,231,120	5,474,939	9.6
1985	121,048,923	60,390,551	4,851,035	8.0
1990	123,611,167	63,595,339	3,918,650	6.2
1995	125,570,246	67,017,987	3,426,497	5.1
2000	126,925,843	66,097,816	2,852,259	4.3
2005	127,767,994	65,399,685	2,703,360	4.1

生産コミュニティと生活コミュニティ

- 農村の伝統社会では、生産コミュニティと生活コミュニティが一致していた。
- 郊外のベッドタウンから中心都市へ通勤するスタイルが定着するとともに、生産の場と生活の場が分離した。
- 都市人口が増大する中でも、生産コミュニティは会社として維持された。
- これに対し、都市部では、生活コミュニティとしての地域コミュニティは十分に形成されなかった。
 - 経済成長優先→生産コミュニティ偏重

内部規範社会としての日本社会

➤ 内部規範社会(市川惇信)

- ここで重要なのは、摩擦を起こさないことであり、普遍的な規範に従うことではない。
- 個別の事情が斟酌されるので、ある意味で温かい社会でもある。
 - お互いをよく知っているから可能
- 普遍的規範がないという事は、常に空気を読まなければならないということでもある。
 - よそのムラから嫁いできた農家の嫁には、息苦しい社会であったかもしれない。

普遍規範空間としての都市

- 都市とは、異なるムラ出身の人間が集まる場である。
- そこで人間が平和的に共存するには、各ムラのルールを超えた普遍的ルールが必要になる。
- しかし、日本では都市化が進んだ後も、それぞれに会社という「ムラ社会」の中で生きてきたため、普遍規範をベースとする都市の文化が形成されなかった。
 - 東京電力には東京電力のムラの掟がある。

都会での孤立

- 日本の都市生活者の多くは、近隣の住民とアイデンティティを共有しているわけではなく、共通の規範に従っているという意識もない。
- それぞれに会社という「ムラ社会」で生きている人々は、隣に住んでいても互いに「よそ者」である。
- ここで退職、離職等により所属する「ムラ」を失うと、日本の都市住民は孤立状態に陥ることになる。

今日の状況

- 低成長社会の中で、アイデンティティの拠りどころを会社に求めて生きていくのは厳しくなっている。
 - 大きな会社も、いつ潰れるかわからない。
 - 非正規労働者が増えている。
 - 長寿化でリタイア後の人生が長くなっている。
- 税収の減少に伴い行政サービスが縮小していく傾向がある。
 - 住民の自助(互助)が求められるかもしれない。

コミュニティ再構築の二つの方向(1)

- 都会の中に新たなムラ社会(内部規範社会)を構築する。
 - この場合は、住民を100~150人程度の規模で組織する必要があると考えられる。
 - 長い狩猟採集時代の際に、ヒトの行動はこの程度の集団規模に適応するように進化してきた。
 - このため、100~150人程度であれば、人間は明示的なルールが無くても社会的行動をとることができる。
 - 「世界がもし100人の村だったら」という喩えがわかりやすいのはこのためかもしれない。

コミュニティ再構築の二つの方向(2)

- 普遍規範に基づく新たな都市コミュニティを構築する。
 - この場合は、多くの人々が納得する普遍規範を見出さなければならない。
 - 「文明の衝突」といわれるように、普遍規範同士が対立している今日の状況は、それらを超える(メタの)普遍規範を見出すチャンスかもしれない。
 - その際には「持続性」(将来世代に迷惑をかけない)というキーワードが、共通認識の出発点となるかもしれない。

日本はなぜムラ社会なのか

- 単一民族と自称している日本社会は、多民族を前提とする帝国の時代を経験してこなかった。
- これに対し、ヨーロッパ、中国、イスラム世界は、いずれも帝国の時代を経験している。
- 多民族が出合えば、そこから必然的に民族を超えた「人間」という概念が生まれる。
- ギリシャ哲学、キリスト教、仏教などの普遍思想の根底にあるのは、この「人間」という概念なのではないだろうか。

参考図書

- 広井良典, 「コミュニティを問い直す」, ちくま書房(2009)
- 小田 亮, 「ヒトは環境を壊す動物である」, ちくま書房(2004)
- 市川惇信, 「暴走する科学技術文明」, 岩波書店(2000)